

GRASP-Japan 事業計画 ボッソウ・ニンバ平成 22 年度事業実施報告書 ボッソウとニンバ山をつなぐ「緑の回廊」植林計画

ギニア共和国ボッソウ村では、チンパンジーと人間が同じ森を共有しながら生活している。2009 年誕生した赤ん坊 1 個体ジョドアモンが 2010 年 6 月 10 日に死亡した。現在、群れの構成は 12 個体となった。

死亡当時、複数のチンパンジーで咳をするのが観察されており、呼吸器系の何らかの感染症に罹り死亡したと推定された。ボッソウでは、1976 年の調査開始以降、移入してきた女性が確認されていない。つまり、集団の高齢化が進み、危機的な状況となっている。ボッソウの東にある世界自然遺産・ニンバ山の両方にチンパンジーは生息する。しかし、その間には長さ約 4km に渡って乾燥したサバンナが広がる。そこで、サバンナに植林をして森をつなぎ、ボッソウとニンバに生息するチンパンジーが交流できるようにする「緑の回廊」計画を 1997 年より開始した。

一部で森林の再生に成功しているものの、サバンナの中央部では強い日差しのために枯れてしまう苗木が多かった。2007 年より、植えた苗木を日差しから守り、苗床と似た環境で生育できるようにサバンナの植林地に東屋を建てた。竹やヤシの葉など現地できりかえし入手可能で環境への負荷が少ない素材を利用している。東屋の竹やヤシの葉は時間とともに朽ちていくが、その間も強い日差しを遮り、苗は枯れることなく成長できることが分かった。2010 年までに東屋を 27 個に増やして経過を観察してきた。すべての東屋で苗木は枯れることなく良好に成長している。高さ 5m を越えるまでに成長した苗木もある。

また緑の回廊はこれまで幾度も野火に焼かれてきた。野火の侵入を防ぐために、乾季には幅 10m の防火帯を設置し、2 名がパトロールに当たっている。これに加えて東屋のメンテナンスとして周囲の草刈りを日常的に進めた。2011 年 2 月 7 日、野火が緑の回廊に侵入し、広い面積で草木を焼く事態となった。それにもかかわらず、草刈りの徹底によって東屋への損害は皆無だった。東屋の周辺やメンテナンス用の小道には燃えるものがなかったため、東屋そのものが野火の延焼を食い止める防火帯のような役割を果たした。東屋を増設し、適切に管理することで、サバンナの日差しと野火にも対応できる植林事業を進めることができる見通しとなった。サバンナで安定して苗を育てる技術開発に成功したことから、2011 年 1 月よりトヨタ財団の支援を受けて約 2 万本の苗木をサバンナに植える新しい植林計画を展開している。

さらに、これまでと同様にボッソウの森における罾猟や保存林の伐採を未然に防ぐためのパトロールに 1 名が従事している。本年度は、チンパンジーが罾によってケガを負う事故はなかった。地域住民の方々にチンパンジーの保全や緑の回廊計画の重要性を理解してもらうために、地域の小学校に教科書を配布するなど支援を継続している。日本国内において、本事業への支援を募るためブース出展を積極的におこない普及に努めた。なお、GRASP-Japan の寄付金使途については別表にまとめた。

主として、科学研究費では支給されない費目を下記に挙げた。今年は、従来の植林作業と並行して、現地ガイド等の業務の見直しを図り、支給する装備・靴・服装等を飛躍的に向上させた。スマ所長が国際霊長類学会のために来日したので、彼に登山靴や雨具などの装備を持ち帰ってもらった。好評だった。別途費用でソーラーパネルを設置して、電灯が静かに灯るようになり、インマルサットとの併用で通信事情が格段に良くなった。

なお、懸案だったボツウの英語本がシュプリンガー社から発行された。



Grasp 保護活動資金 2010 年度支出計画

2011.05.13

収 入	合 計	支 出	合 計
Grasp 保護活動資金	1,100,000	ボツウ環境研究所の共同研究費	80,000
		携帯電話	24,000
		インターネットアクセス USB	30,000
		ガソリン代	12,000
		車修理代	別途支出
		レンタカー代	45,000
		ガイドの登山靴と服	125,000
		車保険代	178,000
		人件費:緑の回廊の植林作業代	158,000
		人件費:緑の回廊・ニンバ山監視代	253,000
		ボツウ郡下の学校等への寄附	50,000
		今期の繰越金	145,000

収 入 合 計	1,100,000	支 出 合 計	1,100,000
---------	-----------	---------	-----------